

遺品（『幽霊屋敷』から）

A Translation of Virginia Woolf's "The Legacy" from *The Haunted House* (1945)

坂本正雄訳

translated by Masao SAKAMOTO

2008年10月2日受理

「ミラー嬢へ」ギルバート・クランドンは妻用客間の小さなテーブルの上に指輪やブローチがごたごたと置いてあるなかから真珠のブローチを取り上げ、「ミラー嬢へ、愛を込めて」と刻んだ献詞を読んだ。

秘書だったミラー嬢にさえも心遣いをするなんて、アンジェラらしかった。でも不思議だ。ギルバート・クランドンは再度思った。友人のひとりひとりに贈ったなにがしかの小さな贈り物も、何でも、そんなふうにしちんと準備しておいたとは。まるで自分の死を予感していたみたいだ。でもあの朝、六週間前だ、家を出たときには身体の調子が悪いなんてことはまったくなかったのに。ピカデリー通りの舗道の縁石から一步踏み出したら、つぎの瞬間車が轢いて、彼女は亡くなった。

ギルバートはミラーを待っていた。来るように頼んだのだ。長い間一緒にいて、彼女にはこれくらいの気遣いを示す記念のものを渡すべきだと思った。そうだ、アンジェラがそんなふうにしちんとすべてを準備していたなんて、座って待ちながら、ギルバートには不思議だった。友人たちは皆アンジェラの小さな形見をもらっていた。指輪、ネックレス、中国製の小さな箱——小さな箱にこだわりを持っていた——それらは皆、宛名がついていた。そしてギルバートには、それぞれ何らかの思い出をまとっていた。これは、ぼくがやったものだ。これは、ルビーの目を入れたエナメルイルカ。ある日、ベニスの裏通りを歩いていたときに、アンジェラが飛びついた。あのときの喜ぶ声が今も耳に聞こえる。ギルバート自身には、これとって何も遺してはいなかった、日記以外には。十五冊の小さな日記。緑のなめし革で綴じられ、ギルバートの背後、書き物用テーブルの上に立ててある。結婚してからずっと、アンジェラは日記をつけてきた。ほんの数回の、ギルバート自身はけんかとは言わせない、まあせいぜい、いさかいだ、その数回のいさかいはいくつか日記の周りにあった。書いている最中にギルバートが部屋にはいると、いつもそれを閉じるか、手で覆うのだった。「だめ、だめ、だめよ。」妻の声が聞こえる。「わたしが死んだらよ——たぶんね。」そうして妻は日記を遺したのだ、形見として。妻が生きていたときに、唯一、共同作業の対象にならなかったものだ。でもギルバートは妻の方が長生きするといつも思いこんでいた。

もし妻が一瞬立ち止まって、自分がどうしようとしているかを考えさえしていたら、きっと今も生きているのだ。でもその方は縁石からそのまま足を踏み出したんですよ。運転手は検死にそう答えた。止める暇もなかったんですよ…。ホールに声がして、ギルバートは我に返った。

「ミラー様です。」女中が言った。

若い女が入ってきた。これまでその女がひとりでいるのは見たことがなかった。それからもちろん涙を流しているのを見たこともなかった。ひどく悲しんでいた。それも無理はない。アンジェラは雇い主としてよりもずっと大きな存在だったのだ。ギルバート自身にとっては、友人だった。椅子を勧め、腰を下ろすように言いながら、思った、この種の女からこの娘だけを区別するのはほとんど無理だ。ミラー嬢はごまんといる。喪服に、小型の書類鞆を提げ、華奢で暗い顔の女。でもアンジェラは思いやりという天分で、ミラー嬢にあらゆる長所を見いだしていたのだ。思慮のかたまりよ。いつも余計なことはしゃべらず、信頼できて、何でも話せるのよ、とかそんなことだった。

ミラー嬢は最初しゃべれなかった。椅子に座り、ハンカチを目に押し当てていた。それからようやく口を開いた。

「すみません、クランドン様。」

ギルバートはつぶやいた。いいえ、よく分かります。当然のことです。女にとって妻がどのような存在だったのか、分かる気がした。

「こちらではずっと、楽しい時間を過ごさせていただきました。」部屋を見回しながら女は言った。その目はギルバートの背後の書き物用テーブルに留まった。ここでふたりは仕事をしていたのだ。この女とアンジェラ。というのもアンジェラは有力政治家の妻という立場に降り注ぐつとめを、運命としてよくこなした。政治の仕事がギルバートがやるに、アンジェラはもっとも大きな助力となってくれた。妻と嬢がそのテーブルに座っているのをよく見かけた。嬢はタイプライターを前にして、妻が言うことを手紙に起こしていた。きっとミラー嬢もそのことを考えているんだろう。さあ、妻が遺したブローチを渡せばいいのだ。かなり似つかわしくない贈り物のように思えた。なにがしかの金を遺した方がよかったのかも知れない。あるいはタ

イプライターとか。でも目の前にあるのだ。「ミラー嬢へ、愛を込めて。」それでブローチを手に取り、考えておいたことばを述べながら、渡した。大切にしてくれることは分かっています、とギルバートは言った。妻もたびたびこれを付けていたんですよ。それから受け取りながら、女もまた前もって用意していたことばでもあるかのように、ずっと大事にさせていただきます、と答えた。ギルバートは、真珠のブローチを付けてもそんなにおかしくはない服を女はほかに持っているだろうと思った。女は制服のように黒の上着とスカートを着ていた。それからギルバートは思いついた、ああ服喪の気持ちを表しているんだ。この娘も悲しい目にあっただけだ——尽くしていた兄がアンジェラのほんの一週間か二週間前に亡くなったのだ。何か事故だったかな。思い出せなかった。アンジェラがしゃべってくれたただけだった。妻は、思いやりという才能のおかげで、ひどく取り乱していた。そのうちミラー嬢は立ち上がった。手袋を付けているところだった。邪魔をしてはいけなと思っていますことが見て取れた。ギルバートは、娘が出て行く前に、将来のことを何か言ってやらなくてはと思った。これからどうしようと考えていますか。何かお手伝いできることがありますか。

女はテーブルを見つめていた。そこに、タイプライターを前に、ずっと腰を下ろしていたのだ。そこには日記があった。それで、アンジェラのことに思いをさせて、女は、何かお手伝いしましょうという、ギルバートのことばに、すぐには返事を返さなかった。一瞬、何のことか分からないようだった。それでギルバートは繰り返した。

「これからどうしようと考えていますか、ミラーさん。」

「これからですって。ああ、大丈夫ですわ、克蘭ドン様。」女は声を上げた。「どうぞお気遣いにならないでください。」

ギルバートは、女が経済的な援助は必要ではないと言っているのだと思った。その種の気遣いは手紙でした方がよいとギルバートは気づいた。今はせいぜい手を握って、「ミラーさん、もしなにかお手伝いできることがあれば、よろこんで...。」と言うくらいに留めておこう。ギルバートは客間のドアを開けた。一瞬、女は敷居のところで、何かの思いに打たれたように、立ち止まった。

女は、克蘭ドンの目を初めてまっすぐ見つめて、「克蘭ドン様。」と言った。ギルバートは初めて、その表情に不意を打たれた。その目は同情をたたえ、それでいて探るようだった。「いつでもわたくしでお役に立てることがあれば、奥様のことを考えれば、大変うれしく存じます。」

そういうと、女は立ち去った。女のことば、それを

言ったときの表情はギルバートには思いもよらないものだった。まるでギルバートの方が女の助けを必要としていることを信じている、あるいは望んでいるかのようだった。椅子に戻りながら、奇異で、突拍子もない考えが、ギルバートのところにひらめいた。これまで、女のことなど気にも留めていなかったのだが、女の方は、小説家がよく言うように、自分への思いを密かに抱いていたのだろうか。鏡の前を通るとき、ギルバートは自分の姿を見た。もう五十を過ぎた。でも自分でも思うことだが、まだ見た目はかなりの男前だ。鏡に映してもそれはよく分かる。

「かわいそうなミラー嬢。」半ば笑いながら、ギルバートは言った。妻がいればこうしたことも冗談として、笑い飛ばせるのに。ギルバートは本能的に妻の日記に目を向けた。無造作に開けたページから「ギルバート」という文字が目飛び込んできた。「ギルバートは見た目がすばらしくて...」まるで妻が答えを準備していたようだ。妻が言っているようだった。もちろん、あなたは女の方には魅力的な男性よ。ミラー嬢ももちろん、そうしたことを感じていたのよ。ギルバートは読み進めた。「ギルバートの妻だということは誇りだわ。」もちろんギルバートもアンジェラの夫であることを誇りに思っていた。外で食事をすると、テーブル越しに妻を見つめ、このレストランで一番魅力的な女性だと何度思ったことだろう。ギルバートはつぎを読んだ。その最初の年に、ギルバートは国会議員の選挙に立候補していた。ふたりは選挙区を駆け回った。「ギルバートが席に着いたときは、歓声がすごかった。支援者がみんな立ち上がって、歌ってくれた。『ギルバートはたいそう立派なやつよ。』わたしは圧倒されてしまった。」ギルバートも覚えていた。アンジェラは演壇の上で、すぐ隣に座っていた。アンジェラが投げかけた視線を覚えていた。その目に涙をためていたことも。で、それから。ギルバートはページをめくった。ふたりはベニスに行った。選挙の後の楽しい休日を思い出した。「フロリアンズでアイスを食べた。」ギルバートはほほえんだ。アンジェラはまだ子どもだったんだ。アイスが好きだった。「ギルバートはベニスの歴史のとてもおもしろいエピソードを話してくれた。ギルバートが言うには何でも、総督たちが...」アンジェラは女学生の字で書いていた。アンジェラと旅行して楽しいのは、何事も熱心に学ぼうとすることだった。わたし何にも知らないのよ。まるでそれは自分の魅力ではないかのように話したものだ。この続きは。ギルバートは二冊目を開けた。ふたりはロンドンに戻ってきていた。「みんなに好印象を持ってもらえるか心配だった。ウェディングドレスを着た。」アンジェラはエドワード卿のすぐ隣に座っていた。手強い老人の、ギルバートの長だ、お気に入りになろうとしていた。ギルバートはざっと目を通して行って、その断片、断片から光景をつぎつ

ぎと思ひ出した。「下院で食事。その後、ラブグロウブズ様の館でパーティ。奥様が、ギルバートの妻としての責任を自覚なさったかしらって、お尋ねになった。」それから。年月が過ぎていった。つぎの冊をテーブルから取った。ギルバートはどんどん仕事にのめり込んでいった。そして当然アンジェラはひとりぼっちになっていった。子どもがいないことはアンジェラにとっては、読んだ限り、大変な悲しみだった。ある日はこういう書き出しだった。「ギルバートに男の子がいたらいいのに。」おかしなことに、ギルバート自身はそのことが残念だと思ったことは一度もなかった。人生は満ち足りていた。ご覧の通りだ。あの年、政府のちょっとした地位を与えられた。ちょっとしたものではあったが、アンジェラの日記はこうだった。「あの人きっと首相になるわ。」事態が別の方向に動いていたら、きっとそうなったのかもしれない。どんな可能性があったのか、ギルバートはページをめくる手を止めて考えてみた。政治はいちかばちかのゲームだ。ギルバートは思った。そしてそのゲームはまだ終わっていない。五十になっても。ギルバートの目はページをどんどん読み進んだ。ページは、些末な出来事、アンジェラの人生を形作っていた、取るに足りない、楽しい、日々の些末事で一杯だった。

ギルバートはつぎの冊を取り上げ、適当なところを広げた。「なんて臆病なのかしら。せつかくの機会をまたやり過ぎてしまった。でもわたしだけのことで、あの人を煩わせるのは、わがままみたいに思える。あの人にはあの子の考えることがあるのに。夕べをふたりだけで過ごすことは滅多にない。」これは何のことだ。お、ここに説明が書いてある。アンジェラが始めたイーストエンドの仕事のことが書いてあった。「勇気を出して、とうとうギルバートに話した。あの子はとても親切で優しい。反対なんかしない。」ギルバートはそのときの会話を思い出した。アンジェラはこう言ったのだ。何もやっていなくて、無駄な人間みたいだ。自分の仕事をやってみたいの。他の人を手助けする何かをやってみたいのよ。ここの椅子に座って、こう言ったとき、アンジェラは頬を赤らめて、かわいかった。ギルバートは覚えていた。少しからかった。ほくの面倒や家庭のことでやるべきことはないのかい。でも、おもしろいと君が思うのなら、もちろんほくは反対しないよ。何なんだい。どこかの地区の活動かい、なにかの委員会。身体をこわしたりしないと約束してくれよ。そういうわけでアンジェラは水曜日になるたび、ホワイトチャペルに出かけるようになったみたいだった。そういう機会に身につける服は嫌悪したことを覚えている。でもアンジェラはまじめに考えていたように思う。日記はその活動のことばかりだった。「ジョーンズさんに会う。ジョーンズさんにはお子さんが十人もいて... 事故でご主人の腕がなくなってしまっ

た... リリーの仕事を探すのに、わたしは最善を尽くしたかしら。」ギルバートは読み飛ばしていった。ギルバートの名前はもう余り出てこなくなった。ギルバートの興味は薄らいできた。いくつかの書き出しは何の意味も読み取ることができなかった。たとえば、「B. M. と社会主義について議論が沸騰した。」B. M. というのは誰なんだ。そのイニシャルにギルバートは心当たりがなかった。委員会かなにかで出逢った、だれか女かな、ギルバートは思った。「B. M. は上流階級に対し激しい意見を述べた。会合の後、B. M. と歩いて帰った。あなたの考えは間違っているわと言った。あの子は心がとても狭い。」そうか、ではB. M. というのは男なんだな。きっとあいつ種類の種類、自分たちをそういう名前と呼んでいるものたちだ。アンジェラが言うように過激で、狭量な輩たちだ。その男に家に来るように言ったらしい。「B. M. は夕食にやってきた。ミニーと握手をした。」ことばの調子でギルバートが抱いているところの中の像にもう一つのねじれが生じた。B. M. というのは小間使いに慣れていないようだ。ミニーと握手をすることは。きっとB. M. というのは女主人の応接室で自分の意見をとくとくとひけらかす労働者階級のふがいない男なのだろう。ギルバートはこの手の男を知っていた。B. M. というのが誰であれ、こういった手合いに興味はなかった。おや、ここにも出てきている。「B. M. とロンドン塔に出かけた... 革命は必ず起こるといふ... 俺たちが住んでいるのはバカの天国だといふ。」B. M. という輩の言いそうなことだ。ギルバートの耳にはその声が聞こえるようだった。その姿、ずんぐりむっくりの小男が目に見えるようでもあった。手入れしていないあごひげ、赤いネクタイ、着た切り雀のツイードのジャケット。その日の仕事をちゃんとやるなど決していない。アンジェラなら、この手合いを見抜く判断力は持っているはずなのに。ギルバートは読み進んだ。「B. M. は... のことでとても不愉快なことを言った。」名前が慎重に消されてあった。「... のことで暴言は聞きたくない、わたしは言った。」また名前が削り取られていた。わたしの名前だろうか。それで、わたしが入っていったとき、日記をすぐに手で覆ったのだろうか。こう考えると、B. M. に対して嫌悪感が高まってきた。B. M. はわたしのことをまさにこの部屋でののしつたのだ。無礼にもほどがある。アンジェラはなぜ話してくれなかったのだろうか。隠し事をするなんて、アンジェラらしくない。率直ということば、そのものだったのに。ギルバートは、B. M. の名前が出てくるところを拾いながら、ページをめくった。「B. M. が子どもの頃の話をしてくれた。お母さんは日雇いの家政婦だったんだそうだ...。そうしたことを考えると、こういう贅沢な生活を続けることには耐えられない...。帽子ひとつに三ギニーも払うなんて。」

わたしにちょっとでも話をしてくれてさえいれば、アンジェラが理解するには難しい問題であの小さな頭を悩ませていたなんて。本を貸したことがあった。マルクスの『目の革命』。同じ頭文字が何度も出てくる。B. M.、B. M.、B. M.。でも、なぜフル・ネームではないんだろう。頭文字を使うことには、アンジェラらしくない、なんらかの、くだけた感じ、親密さがあった。本人を目の前に、B. M. と呼んだんだろうか。ギルバートは続きを読んだ。「B. M. が夕食の後不意にやってきた。運のいいことに、わたしひとりだった。」これがほんの一年前だ。「運のいいことに」——なぜ運がいいんだ。「ひとりだった。」この晩はわたしはどこに行っていたのだろう。ギルバートは予定表で日付を確かめた。マンション・ハウスの夕食会だ。それからB. M. とアンジェラはその晩をふたりっきりで過ごしたのだ。その晩のことを思い出そうとした。戻ったとき、アンジェラは起きて待っていただろうか。応接室は普段通りだっただろうか。めがねはテーブルの上にあっただろうか。椅子がふたつくっついていたかな。何も思い出せなかった。全く何も。マンション・ハウスでのスピーチ以外は何も思い出せなかった。だんだんギルバートには説明のつかない事態になってきた。この全体の状況。ひとりである妻が自分の知らない男を迎える。たぶんつぎの日記に書いてあるだろう。急いで、日記の最後の冊に手を伸ばした。死んで、最後まで書き終わらなかった日記だ。ああ、一番最初のページにこの忌々しいやつがまた出てきている。「B. M. とふたりで食事...。B. M. はだんだんいらいらしてきている。もうぼくたちは理解し合う時期だよと言った。わたしは、お願い、話を聞いてと言った。でも聞いてはくれなかった。B. M. は怖いことを口にした。もしわたしが...。」ページの残りは全部、線で消してあった。「エジプト、エジプト、エジプト」とページ一杯に書いてもあった。他のことばは読み取れなかった。でもただひとつの解釈は成り立つ。このとんでもない男は、妻に恋人になるよう言ったのだ。この部屋でふたりきりでいるときに。血がギルバート・クランドンの頭に上った。ギルバートは急いでページをめくった。妻はなんと答えたんだろう。頭文字はもう

なかった。たんに「あの人」になっていた。「あの人」がまたやってきた。何かの結論に至ることはできないと、わたしは伝えた...。わたしは、お願いだからひとりにしてと言った。」この男はこの部屋で妻に迫ったのだ。でもなぜしゃべってくれなかったんだろう。どうしてためらうことがあったんだろう。それから「わたしは手紙を書いた。」とあった。それから数ページにわたって、何も書かれていなかった。それからこうだ。「手紙には返事はなかった。」それから真っ白のページがさらに続いた。それからこれだ。「B. M. は口にしていないことを実行した。」その後は、その後はどうなるんだ。ギルバートはページをめくり続けた。ずっと真っ白だった。でも死の直前の日に書き込みがあった。「わたしも同じことをする勇気があるだろうか。」それでおしまいだった。

日記がテーブルから滑り落ちていった。妻の姿が目の前にあった。アンジェラはピカデリー通りの縁石に立っている。目を見開いていた。こぶしを強く握っていた。車がやってきた...

ギルバートは耐えられなかった。真実をどうしても突き止めなければ。ギルバートは電話の所まで大股で歩いて行った。

「ミラーさん。」沈黙があった。それから部屋の中に誰かの気配がした。

「ミラーです。」女の声が答えた。

「誰なんです。」ギルバートは怒鳴り声を上げた。

「B. M. って、誰なんです。」

女の家のお宝の時計が、ちくたく音を立てているのが聞こえてきた。それから長く深いため息。それからやっと女がことばを発した。

「わたしの兄ですわ。」

兄だったのだ。ついこの間、自殺した兄だったのだ。「あの、」ミラー嬢の声が聞こえていた。「わたしがご説明できることが何かありますか。」

「いや、何も。何も。」ギルバートは叫んでいた。

ギルバートは形見を受け取ったのだ。妻は真実を語ったのだ。縁石から歩き出して、恋人の所に行ったのだ。縁石から歩き出して、自分の元を離れたのだ。